

矢吹町史

第5卷

民俗編

題字

元矢吹町長 仲西藤次



矢吹駅を中心とした上空からの町（平成16年）



【増補行程記】 大和久



金草鞋 大和久宿

集落と家

奥州道中筋を描いた絵図で矢吹を記しているものは数少ない。「増補行程記」は南部盛岡藩八代藩主南部利見が、江戸日本橋より盛岡中橋までを同藩士清水秋喜に描かせたもので、寛延四年（一七五二）に献上している。

以来盛岡南部家に伝来した稀観本で、現在は盛岡市中央公民館の所蔵となっている。

「新南部叢書」として刊行された復刻版を東洋書院のご好意で関係部分を転載することにした。

下段の木版刷り「金草鞋」奥州道中記は、文政期（一八一八―一八二九）の旅案内で、十返舎一九撰、画師歌川美麿の作で宿場のようすを面白く描いている。



大和久・大和内集落



『増補行程記』 中畑新田



金草履 中畑新田宿



中畑新田通り



奥州道中と水戸街道の分岐点（新町・常夜灯があった所）



『増補行程記』 矢吹



金草鞋 矢吹宿



昭和12年ころの矢吹集落（提供 角田庄一）



旧 紙屋旅館（中町）



「増補行記」 久来石



須釜商店（中町）



矢吹町通り



大正ロマンの館（旧屋形病院）



旧 今出屋（中町）



仲西茶店（中町）



大木代吉本店（本町）



本町通り



石井隆家（本町）



富士屋（本町）



醤油筑前屋（本町）



柿之内集落通り



会田病院（本町）



角田克己家（田内）



矢吹佐忠家（柿之内）



小板橋信昭家（柿之内） 前畑のある屋敷



昭和16年ごろの本村（提供 鈴木広）



中畑（本村）水戸街道通り



原宿集落



根宿集落



鍋内集落



旧 円谷一重家（根宿）



大畑集落



平針集落



堤集落



松倉集落



中野目集落



沢尻集落



泉川俊夫家（白山）
土蔵・本家・作業場・居久根をもつ屋敷



坂路芳治家（須兼新田）
前畑をもつ屋敷



明新集落



三城目集落

仕事着と着物



山ジュパン・あぶらげそで
(提供 井上キク)



山ジュパン・手甲つき
(提供 後藤助一郎)



仕事着 (提供 小磯輝子)



よそ行きの着物 (提供 小磯輝子)



晴れ着 (提供 角田静子)



ハンコ・ねじりすっぽ
(提供 高久ヨシ子)



よそ行きのモンペ
(提供 井上キク)



子ども用綿入袖なしと着物
(提供 角田静子)



男物着物 (提供 角田静子)



男物冬羽織 (提供 角田静子)



子ども用紺
(提供 高久サト)



記念撮影 (提供 高久満定)



子供用の縞の着物
(提供 小磯キクエ)



長襦袢 (提供 角田静子)



男物半纏 (提供 小磯ハルヨ)



文化コート (提供 小磯輝子)



こども用綿入夜着
(提供 角田静子)



石臼



鉄瓶



油なべ



杵、臼



お膳と湯桶 (湯次) (提供 関根信雄)



飯櫃・飯櫃入れ



一般用お膳 (提供 関根信雄)



火消しつぼ



蒸籠 (せいろ)



矢吹町ふるさと産品・いいなづけ



矢吹町ふるさと産品・グーズベリー



徳利 (とっくり) と酒樽

た
べ
る



あんずうめ漬け (提供 丹内昭子)

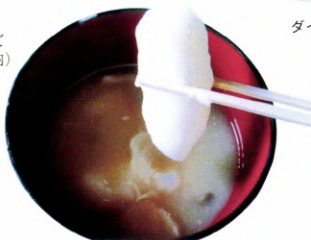


ダイコンの油炒め



大坂落とし (ダイコンの油炒め)

おつよだんご
(田内)



ジャガイモみそ炒め (三城目)



三城目おこわとけんちん汁



本膳 (提供 関根信雄)



祝い樽



長柄銚子



その二

農業絵図

(石川与志栄蔵)



その一



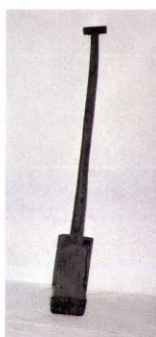
マンノウ (四本)



マンノウと唐鋤



三角鋤



立ち鋤

鋤のいろいろ



三本鋤 (先がとがっている)



三本鋤 (先がたいら)



養蚕・桑まぶし (提供 後藤助一郎)



田植えコジハン風景 (提供 星信之助)



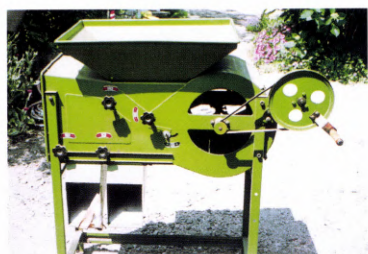
仕事帰り・昭和30年ころ
(提供 蛭田秀子)



もみ打ち



足踏み脱穀機 (提供 佐藤隆)



今の唐箕



唐箕 (提供 後藤助一郎)



動力一乗刈り機 (提供 後藤助一郎)



手動稲刈機の使い方 (提供 佐藤一郎)



手動稲刈機 (提供 佐藤一郎)



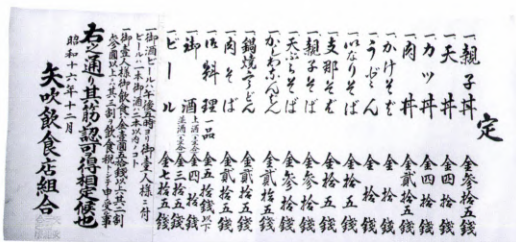
はじめての頃の動力耕耘機



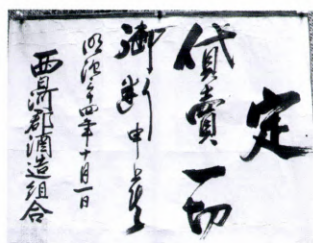
馬耕用双用犁（すき）（提供 佐藤隆）



昭和11年福徳円満壽吳録（提供 青木修一）



飲食店組合「定」



酒造組合「定」



佐久間酒造店一山



中畑村岳酒造店穂妻



大木代吉本店・初期の器樂正宗



中畑村千代倉



大木代吉本店「杉玉」



明治40年仲西商店配付の暦



水さしと茶碗



茶碗 (藤井喬蔵)



香炉 (藤井喬蔵)



おみしゃく (提供 後藤助一郎)



田内キュウリ天王祭 結界



昭和30年代の結婚式
(提供 星信之助)



昭和37年祝儀手伝い
(提供 大木倉吉)



新盆の高灯籠 (提供 小林暢夫)



五月節供 (提供 浅川富士子)



鯉のぼり



雛まつり (提供 浅川富士子)



七・五・三詣り (提供 浅川富士子)



井戸端での談笑 (提供 星信之助)



ブッコロバシ餅 (一升餅)
(提供 高村輝雄)



二区屋台 剣の舞



矢吹神社祭礼みこし (提供 高村輝雄)



昭和17年三城目獅子舞行列（三城目下町）当時の三城目の町並みがよくわかる



平鍬踊り（提供 小林暢夫）



獅子舞（提供 須藤英男）



根宿の三峯神社代参「神璽」



陣ヶ岡旗場



田内観萬不動尊参詣の人々



矢吹新田地蔵尊像
台座の下に明治9年の高低凡号が刻まれている



館山下の矢倉



阿弥陀湯供養塔 三尊来迎浮彫（町指定文化財 提供 村田和義）



三十三観音の一部（提供 佐藤隆）

町制100周年



シンボルマーク（盛岡市 田村勝 図案）
（平成14年7月7日制定）



正福寺本堂格子天井絵（町指定文化財）



平成17年7月7日町制100周年記念式典



10月20日 記念事業 日本三大開拓地サミット宣言調印



記念事業中畑清旗争奪ソフトボール第20回大会（8月10日）
ゲスト、左から中畑清、長島茂雄（巨人軍終身名誉監督）、
山倉和博（元巨人軍）、服部祐児（元力士）、渡辺伴子
（元全日本ソフトボールチーム投手）



打席に立った長島巨人軍終身名誉監督

矢吹町史「民俗編」発刊にあたって

矢吹町長 野崎 吉郎

私たちの町、矢吹は、豊かな人情、風俗を保つ、さわやかな田園都市です。この伝統と風俗を後世に伝え残すため、かねてから「民俗編」の発刊が要望されておりましたが、このほど刊行のはこびとなりました。

矢吹町史は、二十数年前に「目で見る矢吹町史」（ビジュアル版）と通史編一巻・資料編三巻を完成させていましたが、諸般の事情で「民俗編」の刊行がおくれておりました。この発刊によって一応の完結となりますことは、まことに、喜ばしく思います。

申すまでもなく、文化財の保護・保全・文化の振興は行政の責務であり、文化財を後世に遺産として残すこともまた私たちの責務であります。

「民俗編」はその地域に生れ育った住民の習俗そのものの集大成で、非常に広い分野にわたっての生活を記録したものです。日常のさりげない生活、習慣も私たちの先人の労苦の結晶であり、心意の反映であります。これらをもう一度見なおしてみることとは、新しい生活を創っていくこうとする私たちにとって意義あることと考えます。また、その変遷を認知することによって地域の伝統・習俗を理解する手がかりを得ることができないかと考えます。

本編の刊行にあたっては、広い分野にわたっての調査・資料・情報の提供など二百余名の町・内外の皆様のご協力をいただき、また、専門委員の諸先生をはじめ、編纂委員、調査員、事務担当の方々には深く感謝を申し上げます。

本編が完成し、「矢吹町史全巻」が整うこととなります。座右に蔵書され、機会あるごとに、末永く愛読いただければ幸甚に存じます。

平成十七年八月

発刊のことば

矢吹町史編纂委員長 関根直次
矢吹町教育委員会教育長

皆様のお手元に「矢吹町史第5巻 民俗編」をお届けできる運びとなりました。まことに喜ばしい限りであります。

昭和の大合併による新矢吹町発足二十周年を記念して矢吹町史第1巻通史編、第2巻、第4巻資料編が昭和五十年発刊されました。しかし、その後は諸般の事情により、町史編纂が再開されないまま今に至りました。町民にとって、とりわけ町史編纂に携わってこられた関係者にとって、残された「民俗編」の発刊は悲願とも言えるものでした。

それから更に四半世紀が経ち、今度は平成の町村大合併が取り沙汰されてきました。これを機に「民俗編」編纂の気運が高まり、平成十三年度着手に至りました。矢吹町制施行百周年を迎えようとした時期でもありました。発刊の目安は合併の一つの区切りとなる四年後の三月としました。

矢吹が町制を敷いたのが明治三十六年、今からおよそ百年前のことでした。翌年には日露戦争が勃発しています。その頃の生活年表には「天候不順・冷害」「大雨・洪水損害大」「東北地方大飢饉・農民の困窮深刻」「この年矢吹町平年作の二割」などといった文字が繰り返し出ています。戦争への不安と天候不順の連続。科学も医学も技術も発達していなかった当時の人たちは、何にすぎり、何に楽しみを見出し、何に願いを託したのでしょうか。それらをわかり易く語ってくれるのがこの「民俗編」であります。先人の尊い汗と不屈の魂のこもった有形無形の文化財を正しく受け止め、それを後世に伝えていくことが私たちの務めであるならば、この「民俗編」を是非座右に置かれるようお勧めいたします。

最後になりましたが本誌刊行にあたり、貴重な資料の提供を頂いた多くの方々と、調査にご協力頂いた各地区の調査員の方々に厚く御礼を申し上げます。また、短期間の中で執筆にあたられた専門委員長を始め、委員の皆様にかかる敬意と感謝を申し上げます。そして、直接編纂にあたられた編纂室の各位に深くご慰労を申し上げ挨拶いたします。

平成十七年八月

矢吹町史「民俗編」の発刊を祝して

矢吹町議会議長 根本 信雄

矢吹町史「民俗編」が多くの関係者ならびに町民各位のご協力により発刊されるに当り一言お祝いの言葉を申し上げます。

私たちの町、矢吹は先人の絶ゆることのない努力と創意によつて拓き、築きあげられて現在にいたっていることはご承知の通りであります。二十一世紀に入り、社会の変革は更に速度を増しつつ変貌を遂げていますが、そこに生きる私たちは悠久であり、先人の遺産を土台として生活していることは自明であります。その地域には、その地域特有の民俗と伝統を保有しております。しかし近年忘れかけている部分、失われていく部分も少なくありません。このような状況の中で今、知り得ることを記録にとどめおく意義は大なるものがあります。

待望久しかった町史「民俗編」が上梓され矢吹町の民俗文化財がとりまとめられたことは、後世への遺産として、誠に貴重であり、喜ばしい限りであります。

「民俗編」が、既刊の「歴史編」と共に、矢吹をより深く知り、みつめ直す資料として活用され、未来への指標になるものと確信いたします。

おわりに、本編の編集、発刊に尽力されました関係者の皆様方に心から敬意と感謝の意を表し、町づくりの前進を祈念してお祝いの言葉といたします。

平成十七年八月

目次

口 絵

矢吹町史「民俗編」発刊にあたって

発刊のことは

矢吹町史「民俗編」の発刊を祝して

凡 例

はじめの章 矢吹の風土と歴史

矢吹町の略図

第一節 矢吹の風土

一 自然

二 土地利用

三 交通路

第二節 町の成立と変遷

一 ムレからムラへ

二 大和政権の進出と矢吹

三 中世の集落

四 近世の村

五 矢吹町の成立

矢 吹 町 長 野 崎 吉 郎

矢吹町史編纂委員長 関 根 直 次

矢吹町議会議長 根 本 信 雄

第三節 環境の変遷と住民

..... 43

一 奥州道中矢吹宿と往来の人々

..... 44

二 御料地と御猟場

..... 50

三 矢吹ガ原の開拓

..... 61

第一章 衣食住

..... 83

第一節 衣——仕事着・普段着・晴れ着——

..... 84

はじめに

..... 84

一 くらしと衣装

..... 86

二 仕事着と普段着

..... 95

三 晴れ着

..... 108

四 被り物と履物

..... 111

五 寝具

..... 117

六 裁縫と洗濯

..... 118

第二節 食——食生活の変遷と郷土食 つくる・たべる・そなえる——

..... 120

一 食生活の変遷

..... 120

二 普段の食生活

..... 128

三 食料の調達と貯蔵・保存

..... 135

四 子どものおやつ

..... 158

五 ハレの食事

..... 160

第三節 住 — 民家と居住習俗 たてる・すまう・しつらえる —

..... 176

一 ムラの景観と町並み

..... 176

二 住まいの習俗

..... 182

三 建築儀礼と大工の系譜

..... 200

四 民家のつくりと成り立ち

..... 214

五 矢吹町の民家

..... 216

第二章 生業と生産

..... 241

第一節 農 耕

..... 243

一 稲作とくらし

..... 244

二 畑作とくらし

..... 272

三 養蚕と葉煙草栽培

..... 288

第二節 山仕事と川漁

..... 306

一 山仕事

..... 306

二 川や池の恵み

..... 315

第三節 畜 産

..... 323

一 馬

..... 323

二 牛・豚など

..... 330

第四節 商 業

一 商 い

二 そのほかの商 い

第五節 製造業・職人

一 製造業

二 矢吹町の職人

第二章 交通・運輸・通信・交易

第一節 交 通

一 街道と宿場

二 阿武隈川舟運と渡し船

三 交通の発達と生活圏の拡大

第二節 運 輸

一 さまざまな運搬法と運搬用具

二 乗り物

第三節 通 信

一 情報伝達の手段

二 通信の発達とくらしの変化

第四節 交 易

一	行商と市	393
二	馬市と馬喰	394

第四章 ムラ・マチ・イエ ―社会生活―

第一節	ムラとマチの構造	400
-----	----------	-----

一	ムラとマチの定義	400
二	ムラとマチのしくみとはたらき	406
三	ムラとマチの集団と行事	435

第二節	家と家族	449
-----	------	-----

一	イエと家族の定義	449
二	イエの構造	451
三	家族のしくみ	461

第五章 人の一生

第一節	結 婚	470
-----	-----	-----

一	結婚とはどのようなものだったのか	470
二	結婚式次第	472
三	嫁の仕事	479
四	三城目の水祝	480

第二節 産 育

一 子どもを産む

二 子どもを育てる

第三節 葬 送

一 葬儀における役割

二 「ギリ」のこと

三 葬儀の執行

四 神葬祭のこと

第六章 一年の生活 — 矢吹町の年中行事 —

第一節 年中行事はどのような日か

一 働く日と休みの日

二 変化する生活の周期

第二節 矢吹町の年中行事の事例

一 正月の準備と正月の行事

二 春から夏にかけての行事

三 盆の準備と盆行事

四 盆過ぎから秋、冬にかけての行事

第三節 矢吹町の年中行事記録

第七章 いのり・まつる

第一節 神社・小祠と神まつり

一 矢吹町の神社と小祠

二 中畑・三神・矢吹の神社と信仰

第二節 家・屋敷にまつられる神

一 屋内の神

二 屋敷地にまつられる祠と神

第三節 寺院・仏堂とほとけへの信仰

一 矢吹町の寺院と仏堂

二 寺史・寺内状況・行事

三 矢吹町の仏堂

第四節 いのり・はらいの諸相

一 子安（講）と観音・地藏信仰

二 念仏と光明真言信仰

三 馬頭観音信仰

四 古峯原（神社）（信仰）

五 三峯山（神社）（信仰）

六 石尊（阿夫利神社）信仰

七 湯殿山信仰

八 飯豊山信仰 666

九 三十三観音願礼および廻国 667

一〇 庚申様 671

一一 十九夜様 673

一二 二十三夜様 676

一三 十七夜と二十二夜 677

一四 いぼ神 678

一五 原宿の熊野講 678

一六 わかさまの神託・口寄せ聞き 680

第五節 矢吹町の講 683

第六節 俗 信 686

第八章 民俗芸能 691

第一節 概 説 692

一 民俗芸能とは 692

二 矢吹町の民俗芸能 693

第二節 三城目の獅子舞と平鉾踊り 695

一 三城目の獅子舞 696

二 三城目の平鉾踊り 700

第三節 明新の獅子舞

第四節 念仏踊りと太鼓

一 大和久の天道念仏踊り

二 根宿の天王祭太鼓

三 原宿の二十三夜講念仏太鼓

四 田内の天王祭太鼓

五 三城目の歌念仏踊り

六 松倉の相撲太鼓

第五節 祭り囃子と祝福芸

一 矢吹の祭り囃子

二 中畑の会津万歳

三 神田の田うない踊り・相撲踊り

第六節 盆踊りと民謡

一 盆踊りと盆唄

二 根宿のごんたん踊り

三 その他の民謡

第九章 遊びと方言

第二節 子どもたちの遊び

一	屋外での遊び	749
二	屋内での遊び	755
三	学校での子どもたち	758
第二節	「ことば」の文化	763
一	ふるさとの昔話	763
二	ふるさとのことば	787
おわりの章 矢吹の民俗 ―『矢吹町史』民俗編のまとめにかえて―		
823		
	はじめに	824
	第一節 民俗とはなにか	824
	第二節 矢吹町の民俗	830
一	衣食住	831
二	生業と生産	834
三	交通・運輸・通信・交易	837
四	ムラ・マチ・イエ―社会生活―	838
五	人の一生	841
六	一年の生活―矢吹町の年中行事―	845
七	いのり・まつる	847
八	民俗芸能	851

九 遊びと方言

おわりに

索引

関係者一覧

後記

別冊Ⅰ

矢吹町史民俗編資料集

別冊Ⅱ

矢吹町せいかつ年表

凡 例

- 一、 本編は『矢吹町史』第5巻「民俗編」である。『矢吹町史』第1巻（通史編）第2巻（資料編Ⅰ）第3巻（資料編Ⅱ）第4巻（資料編Ⅲ）は昭和五十二年から昭和五十五年に発刊された。
- 二、 本編は、文化財保護法第二条による「民俗文化財」の各分野について記述されている。
- 三、 本編の内容は、平成十四年度から平成十六年度までの三年間にわたる民俗調査票による調査、調査員の情報提供・調査、協力者の情報提供、専門委員の分野ごとの聞きとり調査、現地調査、文献調査、編纂室所有の記録、文書、調査資料、既刊『矢吹町史』を活用してまとめた。
- 四、 本編は、本文及び資料編（別冊）、年表（別冊）をもって構成されている。
- 五、 用字・用語は当用漢字、現代かなづかいを原則とし、文章表現は平易にととめたが、引用文、民俗的表現や歴史的用語については原則によらない場合がある。
- 六、 引用資料については出典名を付し、原文にしたがったが適当と認めた場合は一部誤字やかなづかい、漢字を変えたものもある。引用資料は文字の号級を変えた。
- 七、 本文中の敬称は原則として省略したが、文中の流れにより例外もある。
- 八、 写真は町史編纂室保管・撮影と協力者によるもので、提供者が明確な場合は記名した。
- 九、 図表は執筆者が作成し出典を明示した。
- 十、 本編の執筆・編集にあたり町内外の多くの方々や関係機関にご協力いただいた。関係者名とともに巻末に記して謝意を表した。
- 十一、 本編の執筆者は、巻末に掲示した。